BROADCASTING CREATORS' ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No.56
2012.6.4

〒102-0094　千代田区紀尾井町１－１　千代田放送会館　３階
TEL&fax03-3221-0019　Mail info@hosojin.com　　代表幹事　今野　勉
編集担当　伊藤雅浩（広報委員長・編集長）、鈴木典之、前川英樹（ＨＰ担当）、松尾羊一　事務局　佐藤　真美子

放送人の会は何をしてきたか

代表幹事　今野　勉

もう1期、代表幹事の任を担うことになりました。それについての感慨を含めて、放送人の会のこれまで、と、これから、に思いを馳せてみたいと思います。

初心にかえる

ＮＨＫ、民放を問わず、放送の制作現場で、いわゆる〝やらせ〟などの不祥事が頻発し、社会的に大きな問題となった時期がありました。放送、とくにテレビ番組の制作のありように対して、マスコミや一般視聴者の批判、非難が経験したことのない激しさで押し寄せてきました。危機感を募らせた制作関係者たちが、誰に言われたわけでもなく、自主的に集まって、その状況にどう対応したらいいか、との思いで結成したのが、当放送人の会でした。

こんな解りきったことを敢えて書いたのは、最近届いたＢＰＯ（放送倫理・番組向上委員会）の報告書に、昨年度もまた、放送の現場における不祥事が相次いでおり、その背景として、放送制作現場の劣化が挙げられていたからです。報告書には、ＢＰＯがテレビ局に送った幾つかの提言が、放送現場に伝わっていないという、ＢＰＯの徒労感のようなものが漂っていました。

放送界は、放送人の会発足から14年目の今日まで、想像をはるかに超えた劇的変化を遂げました。しかし、肝心の制作現場は、もしかして何も変わっていないのかも知れません。

初心、忘るべからず、と、私は、複雑な気持ちで、自らに言い聞かせているところです。

歳月の重み

とは言え、14年の放送人の会の活動は、私たちが考えた以上に、大きな評価を得つつあるのも事実です。

当初、放送界の緊急の課題を掲げて、シンポジウムを開くなどして、それなりの評価を得てきましたが、一方で、視聴者とのコミュニケーションを図る「名作の舞台裏」や、放送史を構築するための資料としての「放送人の証言」の収録などの催事・事業を地道に行ってきました。今、それらが各方面から注目を浴びています。

「名作の舞台裏」は、第1回の「岸辺のアルバム」からこの4月の「鈴木先生」で32回となりました。ドラマ以外の、バラエティーやワイドショーなどの番組の舞台裏のエピソードを語る「人気番組メモリー」は、3月の「ザ・ベストテン」で9回を迎えました。

「名作の舞台裏」と「人気番組メモリー」は、放送番組センターの財政的、人材的協力を得て、続けられています。

「放送人の証言」については、前号でその全容をお知らせしました。２００人に迫るオーラル・ヒストリーを、画像つきで収録するのは、放送史上、例のないことだそうで、放送文化基金の長年にわたる助成なしには成立しませんでした。

もちろん、多くの会員や幹事の皆さんのボランティア的協力があってのことです。

証言の歴史的価値を認められて、ＮＨＫ放送文化研究所と東大大学院情報学環がそれぞれの予算で文字化作業を引き受けて下さっています。有り難いことです。

来年が日本でテレビ放送が始まって60年ということもあって、ＮＨＫ放送文研をはじめとして、「放送人の証言」を活用した企画が考えられているようです。

当会も折角の財産ですので、何らかの企画を考えてみたいと思っています。

「名作の舞台裏」や「人気番組メモリー」、そして「放送人の世界」「ドキュメンタリーワールド」で蓄積されてきたエピソードや資料も、その価値は極めて大きいと思います。

放送人の会は現在に問い、後世に語り継ぐべき財産をこの10数年で蓄積してきたことをお互いに確認し、放送人のこれから、の新たな方向を視野に入れつつ、新たな歩みを始めるのだ、と、私なりに決意しているところです。会員の皆様のご参加を期するところです。

上段左から　竹園元氏　登坂琢磨氏　内田ゆき氏　安達もじり氏　城谷厚司氏　今野勉氏
下段左から　小池佑治氏　浜谷光太郎氏　島修一氏　増田秀樹氏　秋山浩之氏

グランプリ　増田秀樹様

あなたは、ETV特集「ネットワークでつくる放射能汚染地図」「原発事故への道程」シリーズで、大地と海が深く傷ついている原発事故の実態と、日本の原発安全神話が作られた政治的経済的プロセスを、するどく描き出しました。その得がたい成果を讃えて。

準グランプリ　岩城浩幸、秋山浩之と73人の記者の皆様

あなたがたは「3．11大震災～記者たちの眼差し」で、各局の若手記者たちの主観的で個人的なリポートをあえて多数積み重ね、震災の惨状と深刻な意味を客観報道とはちがう生々しさで伝えました。その新鮮な手法の成功を讃えて。

特別賞　ドラマ「カーネーション」制作スタッフ様

連続テレビ小説の常套的なヒロイン像を大胆に打破、だんじりの上で命がけの跳躍をする大工方のイメージそのままのユニークなヒロインを作り出すとともに、戦争や死の描き方も単なる情緒的表現をこえて新鮮なものがありました。制作スタッフによるその成果を讃えて。

奨励賞　登坂琢磨様　竹園元様

ドラマ「深夜食堂」は、味わいが一色になりがちなテレビドラマ界に、小気味よい新風を送り込みました。映画監督の起用、個性的キャスト、セット細部の凝りようなどがひとつの世界をつくり出し、製作委員会方式によるドラマ制作という試みも成功させました。その成果を讃えて。

奨励賞　島　修一様

あなたは、小松左京原作の「日本アパッチ族」を脚色・演出し、ユーモアとアイロニイと恐怖に満ちた魅力的な「鉄になる日」に仕立てました。鉄を食う音、戦闘シーンの効果音などもラジオドラマの可能性を再発見させるものがあります。その成果を讃えて。

放送人グランプリ贈彰式は5月19日（土）午後4時から青山荘1階けやきの間で行われた。以下はその時の録音の記録である。

選考経過

堀川　例年選考経過、受賞理由について私が説明していますが、毎年30分以上かかりました。一人でそんなに喋るのはいかがなものかと反省し、今年は選考委員の方にも手伝っていただくことにしました。

堀川とんこう氏

全体の経過をまず述べます。例年のように会員による推薦の投票を行いました。今年の特徴は3・11の災害関係、原発事故関係の番組に集中したことです。他は1件1票という感じで票がばらけました。投票した会員は「こんな年だから災害、原発の番組に票が集中するだろう」と予想し、「放送はそれだけではないぞ」とお考えだったのかもしれません。

それらは受賞には結びついていませんので、選考委員はもったいない、非常に残念だと熱のこもった討論をいたしました。亡くなった萩野さんの1票もあり、感慨深いものがあります。

後程各委員に発言していただきますが、選考はあくまで合議で行われ決定したものです。委員が触れる作品はその委員が一人で強く推薦し決定したものではないことをご理解いただきたいと思います。

受賞なさった方はここにいらっしゃいますが、実は受賞した作品はＮＨＫとＴＢＳ系列の番組ばかりです。こんなことは初めてです。例年もっと全国に散らばっているのですが、今年、民放はＴＢＳと同系列のＭＢＳ、あとはＮＨＫになりました。偏っていて内心気が咎めています。

今年の受賞作の特徴を述べます。今年、災害、原発の関係の番組がたくさん放送されました。災害、原発報道の最初のころは「発表報道」という批判がありました。客観報道であろうとした、あるいはみずから現場に近づいて取材ができない、といった条件があり、どうしても政府や安全委員会の発表に依拠して報道する状態が続きました。そこから一歩前へ出たい、発表だけでは真実に至らない、との考えがそれぞれの現場を刺戟したと思います。初期の報道姿勢に果敢に異議を申し立てる番組が出るようになりました。今回選んだ報道の2作品にもそんな特徴があらわれています。

その他の受賞作品「カーネーション」、ラジオドラマ「鉄になる日」、テレビドラマ「深夜食堂」、これらは現在のラジオ、テレビのドラマの枠を打ち破ろうとした意欲的な作品です。

5つの受賞作品に共通しているのは、果敢に挑戦する、ということだと思います。

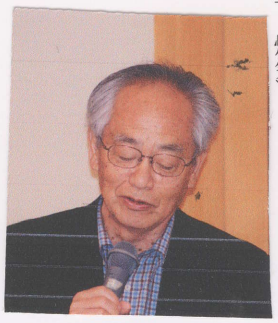
受賞の電話をさしあげたとき、皆さん大変喜んでいただきました。ここに来ていただいてありがとうございます。

ここにいる放送人の会の会員はほとんど皆さんの先輩にあたる年齢の人たちですが、皆さんが頑張っておられることを喜び、これから優れた仕事をなさることを期待しています。その意味で、この賞は先輩が後輩に敬意と感謝をあらわす賞だとお考えください。

それでは選考委員それぞれからそれぞれの人、番組が受賞するに至った経過と作品について話してもらいます。

まず、グランプリの増田秀樹さんについて河野尚行さんから。

河野　今、堀川とんこう委員長が「先輩が後輩に感謝する」賞だと言われましたが、グランプリをとった増田さんには先輩面をして感謝したいと思います。（会場拍手、爆笑）


河野尚行氏

原発事故の放射能汚染の状況を素早く映像化した「ネットワークで綴る汚染地図」は見ている人たちにかなりの衝撃を与えたと思います。同時に、原子力発電所なるものがどういう政治的、行政的、科学的プロセスを経てこの日本に持ち込まれたのか、その際、どういう種類の契約を結んで稼働し始めたのか、を関係者、当事者の証言で追跡して明らかにした「原発事故への道程」（前後2回、9月放送）を見て、私は緊急報道を40年くらいやってきましたが、「ああ、自分はこの巨大な原子力発電のシステムの肝心なところをほとんど知らなかった」と思いました。また、9月のこのシリーズの前後に、事故の詳細についてＥＴＶ特集でやっていますが、つくづく「ディテールについて知らなかった」と思いました。原発の廃棄物についてはその行方を追跡するエネルギーが現役時代にはなかったのだ、と衝撃を受けました。痛恨の極みで、後輩たちの仕事には率直に「参ったなあ」と思っています。

今日ここにいる放送人の会の皆さんは現役時代に放送番組を作ってきた人たちで、お解りと思いますが、番組は企画を通し、取材して作ったディレクターのものです。つまり「俺が、俺が」の世界です。しかし、ある時期、持続的に集中的にある角度から番組を作ることになると放送局であれ、プロダクションであれ優秀なプロデューサーが必要です。２０１１年の初頭から２０１２年にかけてＮＨＫ・ＥＴＶ特集班に増田秀樹というプロデューサーがいた、そして1年間に20本以上の番組を世に送り出したことは非常に意義のあることだった、と感じています。多くの人の賛同を得て、グランプリを得たことは本当に喜ばしいことだと思います。先輩として後輩の

増田君に大変感謝しています。ありがとうございました。

（拍手）

堀川　次に準グランプリに輝いた秋山浩之さんの番組「大震災・記者たちの眼差し」について鈴木典之さんから。

鈴木　「記者たち眼差し」と言う言葉は業界の中で流行語になって耳にすることが多くて、ここにいらっしゃる方はどんな番組かご承知だろうと思います。この番組は一人称で語るということで有名ですので、私もできるだけ一人称で語ろうと思います。

鈴木典之氏

今回の大震災で国全体が受けた衝撃、影響の大きさはこれまでのパターン化した方法ではすくいとれない、伝え切れないと、これまでジャーナリズムに関わってきた個人として痛切に思います。同時にこれはメディアがきびしく試されるチャンスだったと思います。「記者たちの眼差し」が個人的にも印象深かったのはパターン報道から抜け出た新鮮さです。これが人の心を打ちました。メディアの内側に対しては原点に立った報道の大切さをあらためて思い知らせてくれた。はっと気が付く、という部分があったと思います。視聴者には個人的にもショックや葛藤があります。個人の心情と記者たちの心情が素直に共鳴し合って感動を与えたのだと思います。

この番組が評価されたのは当事者感覚による一人称報道で、新しい報道の形として発見されたものです。そして、多面的な災害のスケールをオムニバスというかたちで集約した、この二つの手法が非常に新しいものだったと思います。

ただ、内容的には玉石混交、素直なだけでは報道にならないと感じたところはありました。その意味ではこれから工夫し、向上する余地があります。

私は日頃「しっかりしろTBS」という気持ちを強く持っていますので、日頃苦労しておられる秋山さんの苦労がやっと認められたなあ、ととても嬉しく思います。秋山さんに敬意と感謝を捧げるものです。願わくばこれを機にTBSとその系列局の存在感を継続的にアッピールする企画を連打して欲しい。いいチャンスです。

ドラマではTBSの復活は著しいという評価があります。やや精彩を欠いていたドキュメンタリー部門でも今がチャンスだという気がします。

これは言わずもがなですが、「報道の魂」のような番組が深夜の時間帯で放送されることは不満です。あまり見られないのだが、それでも放送できればよしとする、そんな雰囲気がまかり通っているなら、そろそろあらためるべきです。この賞を跳躍台にして欲しい。青臭い、素人っぽい議論かもしれませんが、これから大事なことです。TBSだけでなく民放の皆さんはこの機会に頑張って欲しい。メディアはテレビだけではない、としきりに言われるご時世ですからよくよく考えて欲しい。今回の表彰は先輩たちのそんな思いのこもったものだと留意してください。

おめでとうございます。

（拍手）

堀川　今日は秋山浩之さんがお見えですが、表彰状には岩城浩幸、秋山浩之と73人の記者たち、となっています。73人というのは放送に使われた記者たちの数です。これは秋山さんたちTBSの報道から各局に発注したものだと思っていましたが、そうではなく、募集して応募してもらったもので、応募数は１００を超えたそうです。その中から選んで一人８分ずつつないだものです。

では、次にドラマ「カーネーション」について藤久ミネさんから。

藤久　私は朝の連続テレビ小説のあまりいい視聴者ではありません。それは主として朝寝坊だという理由からですが、この「カーネーション」は脚本の渡辺あやさんについて、前にお書きになった「火の魚」「この街の子ども」を存じ上げていて見たいと思い、かなり頑張って朝の８時にテレビの前に座れる状況を作って拝見しました。

最初に感じたのは「ドライなドラマだなあ」ということです。非常に乾いています。わが日本国では芝居、映画を通じて連綿と続くお涙頂戴という立派な手法があります。特にホームドラマ、メロドラマではこの手法は使われますが、この「カーネーション」では、まるで禁じ手のようにこの手法が使われません。主人公の糸子は祖父母、両親、夫を亡くしますが、一度たりともその人たちが死ぬ場面、更にはそこで家族が集って枕辺で涙を流すなどというシーンはワンカットも出てきません。非常に感心しました。死んだという情報はドラマの中で伝えられるのですが、そこで延々と視聴者をつって行くという手法がない。これはおそらくテレビドラマでは非常に珍しい、新しい果敢な挑戦ではなかったかと思います。

藤久ミネ氏

ドラマの最初に出てくる岸和田のだんじり祭りは主人公糸子の人生を象徴する形で使われています。走るだんじりの上で大工方が飛ぶという必死の業を見せますが、それが糸子の生き方に実にうまくつながります。それは脚本の功績が大きいのですが、演出もいい形で呼応している。配役は面白かった。木之元のおっちゃん、ほっしゃんというタレントを私は初めて知りましたが、うまく使っている。そして綾野剛さん、そんな俳優さんたちが非常に個性的である程度の演技力があり、しかもしょっちゅうテレビに出ている人ではない、しかも地元の

雰囲気をうまく出している、ということに感心しました。

私は「放送人の会」の新年号の会報に「カーネーション」を好んでみている、と書きましたが、すると「ステラ」に渡辺あやさんのインタビューが載っているとわざわざ送ってくださる方がありました。そのインタビューで渡辺あやさんは「ひとが齢をとるということは人生の周囲がアウェイの感じになることだ」と発言しています。私にはその心境がひしひしとよくわかります。毎日変わらぬ生活をしているのですが、遠征地にいるような状態に頭やからだの状態がなっています。そんな意味で、だんじりの上で勢いよく跳ねる小野真千子さんの糸子から夏木マリさんの糸子に変わった必然性も納得できる気がしておりました。考えてみればそれぞれの人がそれぞれのだんじりの上で命がけで飛ぶのがそれぞれの人の人生というものかもしれないなあ、と思います。

朝のテレビ小説はそろそろ半世紀になります。人気を博した作品、優れた作品がありましたが、それらは文学賞になぞらえれば直木賞的だったと思います。「カーネーション」で朝のテレビ小説は芥川賞的になったと感じて、毎朝楽しく拝見しました。ありがとうございました。

（拍手）

堀川　私も「カーネーション」は好んでみておりました。このところヒロインの人間像はパターン化し、メロドラマ風になっていた、それを見事に、大胆に打ち破ってあんなヒロイン像を作ってみせた、というのがプロデューサーの勇気で、大阪だから出来たのかもしれません。で、次の「梅ちゃん先生」が始まって「何だ、戻っちゃったじゃないの」（会場・笑い）という印象です。

では奨励賞の「深夜食堂」。今日はプロデューサーの登坂琢磨さんと竹園元（はじめ）さんがお見えです。桧山さんから話していただきます。

桧山　私は先輩じゃありません。すみません。（笑い）

桧山珠美氏

「深夜食堂」は今回2シリーズ目です。1シリーズ目に表彰されなかったのは、作品が悪かったためではなく、今日のために残してあったのだと思います。映画もテレビドラマも続編はひと味落ちると言われますが、この「深夜食堂」はシリーズ1のクオリティーを保ちつつ更に挑戦を続けて」います。同じテーストで同じ世界観で新しい試みをやっています。このスタッフはこれぞプロの仕事という仕事をしています。キャスティングもそうですが、自動販売機の中のジュースの一つ一つにもこだわってそれぞれにプロの仕事をしています。その集大成がこのドラマになったと思います。30分をここまで余すところなく使い切った素晴らしいドラマです。TBSの人たちの会で「TBSもこんなドラマが作れるのだから、捨てたものじゃない」と言ったら、実はMBSのドラマでしらけたことがありますが、それくらい「深夜食堂」は今のドラマにない素晴らしいものだと思います。今のドラマは使い捨てで、1話ごとに新聞などで批評され視聴率が問われ、視聴率が悪いと打ち切りが検討され、視聴者に心が届くものが少ないのですが、これは数少ない心にしみるいいドラマだったと思います。出てくる食べ物がおいしそうで、私のからだの脂肪は「深夜食堂」の唐揚げをみてコンビニに買いに走ったせいではないかと思います。オダギリジョーは素晴らしく、彼の名誉回復のために是非シリーズ3を作ってください。

（拍手）

堀川　民放各局の作っているドラマのテイストが一色になってしまう。制作者それぞれは独自のものを作ろうとしているつもりでも同じ小さな池に住む金魚たちですから似てしまう。そんなテレビドラマ状況のなかで東京の池でないところに住んでる人が作ったドラマという気がしました。それは脚本や演出に映画の人を起用していることもあるのでしょう。ご紹介しておきますが、このドラマは製作委員会方式で作られています。これはテレビの世界では非常に珍しいことです。何故製作委員会方式だったのかについては確かめていませんが、おそらくMBSはキー局と違って企画の段階でスポンサーを獲得してから制作するということが出来ない。むしろ映画と同じようにお金を少しずつでも出して制作に参加してくれるスポンサーを探し、お金のメドがついたところで制作を始める、という手順を踏まざるをえなかったのではないか、と想像します。いずれにしろ、映画では一般化している製作委員会方式をテレビの世界に持ち込んで成功させたのは面白いことですし、立派なことです。

では、次に奨励賞のラジオドラマ「鉄になる日」を作られた島修一さんについて石井彰さんから。

石井　私は先輩ではなく同世代、あるいは仲間だと思っていますので、感謝より嫉妬して（笑い）あげた賞です。

石井彰氏

「鉄になる日」の原作は昨年亡くなられた小松左京さんが初めて書いたSF長編小説「日本アパッチ族」（光文社・刊）です。今は残念ながら絶版になっていますので、図書館の保存書庫には必ずありますからそちらでご覧ください。初の長編小説には作者の一番言いたいことがあらわれるそうですが、この小説も小松左京の一番いい部分が凝縮されています。働かないことから大阪の軍需工場跡地に追放された男がそこで何故か

これをテレビでやろうとすると多分数十億円かかるでしょう。それを数百万もいかない費用でお作りになった。こんなことがラジオドラマにできるということをあらためて認識させてくれた。

鉄を食べ、鉄になった男・女たちは日本政府・アメリカ軍と大戦争を起こします。僕はここに橋本ハシズムに対するMBSのひそかな抵抗、風刺と感じ、勝手に拍手喝采を送りました。

何より素晴らしいのは、大変な長編小説を1時間のラジオドラマにまとめあげた大胆さです。脚本は島さんがお書きになったのですが、小松左京のご遺族のご了解は得られそうにないような、強引な脚色ですが、小松左京の精神、書きたかったことはこんなことだろうというものがしっかり残っています。だからご遺族は快く承諾なさったのだと思います。

次に素晴らしいのは音響効果です。鉄を食べる音なんて、僕が音効マンで作れと言われたら、「できません」と断ります。ミサイルの音は作れるかもしれないけど、ミサイルがアパッチ族に当たって跳ね返って、次々跳ね返る音なんて無理です。今日ここに来ていただいていますが、その音を若い音効マンが見事に作りました。この作品は芸術祭最高賞、グランプリを獲得して既に評価は高いのですが、それでも多くの人は知らない。その悔しさをこめて奨励賞を送るものです。

実は毎日放送の音響効果は非常に伝統のあるところです。イラストレーターの和田誠さんのお父さん（和田精）がNHKから毎日放送へ行き、毎日放送の音響効果の基礎を作られた。現在の人たちは勿論あったこともないはずですが、「音効の毎日」は伝説になって生き続けていました。それを今引き継いで、精神のリレーが行われた。

小松左京の小説を皆さんもう一度読んで頂きたいのですが、「果てしなき流れのはてに」も含め音が素晴らしい。それは何故かというと、彼は小説家としてまだ売れない時期にラジオ大阪で毎週ラジオのニュース・コントを書きなぐっていた。そんな人が書いた小説だから、音なのです。音の想像力なのです。そのことに小松左京さんは気づいていた。ラジオ大阪のニュース・コントは生放送ですから大変だったはずです。そこから小松左京は育って小説家になる。ラジオが育てた作家ということに気づかせてくれたことを毎日放送に感謝します。

昨日、首都圏ラジオ聴取率調査の発表がありました。全世帯聴取率、全局合計のセット・イン・ユースが7・2％から一気に0・5％落ちました。震災で一時上がったのですが、震災の前に戻ってしまった。震災でいろんな人がラジオを聞きました。だけど「聴いたらつまらない、面白くない」とラジオから離れ始めています。この数字が6％を切ったらラジオは瓦解します。そんな瀬戸際のときにいまだにリスナーからメールを募集してつまらないパーソナリティーがべちゃべちゃ喋っている。こんなことをやっていたらラジオは間違いなく潰れます。

大阪のMBSはいいラジオドラマを作り、夜には「種まきジャーナル」という小出裕章さんが毎日出る番組、そして「深夜食堂」をやっている。僕はMBSのラジオ・スピリッツを高く評価します。東京のラジオ局には「MBSを真似しろ」「ラジオドラマの一つも作ってみろ」と言いたい。

僕は小松左京が大好きですから、こんな作品を作られて悔しい。小松左京にほんとうはこの作品を聞かせたかった。作った皆さんに心から感謝します。ありがとうございました。

（拍手）

堀川　私が一人でやるより時間が短かったかどうか疑問ですが（笑い）、選考委員の話はこれで終わりです。表彰に移ります。

受賞者の発言

増田秀樹　このたびは誠に栄誉ある賞を頂きありがとうございます。

増田秀樹氏

先ほどの話の中に「感謝」という言葉がありましたが恐縮の極みです。たまたまその場にいた、そして条件があったということだと思っています。NHKは組織ジャーナリズムの最たるもので、大きな組織があり、いざというとき人は動員しやすい。また、公共放送ですから東京電力とのしがらみは基本的にない。そのためにこんな放送制度が維持されてきたのだと思っていました。そんなしがらみがないのだから、今年原発報道をしなかったら存在理由がないではないか、と思いました。

私が担当している「ETV特集」はマイナーな辺境の低予算番組です。日頃コンパクトにやっていますので、機動性、動きやすさはあります。

NHKスペシャルは看板番組で30人くらい人がいますので、会議をして意見をきくと30人目のときは最初の人の意見を忘れていたりします。そのうちディレクター個人の思い、取材したときの着眼点などがだんだんうすれてきます。それに比べると「ETV特集」は基本的にCPは私一人、ディレクターも少数です。そんなコンパクトさが震災報道をやりやすくした条件です。たまたそこに私がいたわけで、果たすべき役割を果たしていたとしたら、よかったなあと思います。

「ETV特集」の先輩には昨年こちらで特別賞をいただきました大森がいます。大森がよく言うのですが「ETV特集」は会社の中で踏みつけにされている、飛ばされているくらいがちょうどいいんだ、そうです。確かにそうだと思います。3・11以降もいろんなことがあり、局内では決して褒められたことはないのですが、そのため自動的に身を低くする、目線を下げることが身に付きます。何かあると「潰せ」と言う声があがりま

る、目線を下げることが身に付きます。何かあると「潰せ」と言う声があがりますから、脇をしめて、誤報や間違いはしない、あるいはセンセーショナリズムとは距離を置き、慎重にやっていけないという緊張感の中で、望んでいるわけではありませんが、そうやっています。

原発の報道では最初にいろんなことがありました。かなり知られている話ですが、30キロ圏の中にうちのクルーが入ったことでずいぶん叱られました。しかし折角撮ったものは出したいと上層部と折衝する中で、ある時期私のスタンスは決まりました。これ以上やると増田が潰されるから諦めようと一人のディレクターが言い始めました。そんな優しい言葉は聞いたことがなくて、物凄く感激しました。この1年は管理職ではありますが、自分の軸足はやはり現場にあったと思います。

その日もやるだけはやろうと思って、出かける前に女房に「もしかするとやめなきゃいけないかもしれない」と言うと、すっと隣の部屋へ行って山ほど温泉のパンフレットを持ってきて「やっと行けるね」（笑い）と言いました。それで覚悟が決まりました。

とりとめのない話をいたしました。私は当たり前のことを当たり前にやっただけだと思っていますが、もし放送界の中で果たすべき役割が担えたのだとしたら大変よかったと思います。

このたびはまことに有難うございました。

（拍手）

秋山浩之　秋山です。このたびは名誉ある賞をいただき有難うございます。

秋山浩之氏

新鮮な番組とお褒め頂いたのですが、私としては放送人の方々のDNAを受け継いだ番組だと考えています。

番組の最初と最後に災害の現地をずーとドリーして行く映像があります。タイトルバックとエンディングに使ったものですが、バックに「ドクッ、ドクッ」という心臓音を使いました。これはかつて萩元晴彦さんがラジオ時代に「神これを癒し給う」という心臓外科手術のドキュメンタリーを作ったときの音です。私はかつてこれを聞いて非常に衝撃を受け、いずれはこの心臓音を使った緊張感のあるドキュメンタリーを作りたいと思いました。この番組を任された時、音はこれだと決めました。あの映像を撮ったのは森雄吾くんという腕利きカメラマンですが、彼のお父さんは今野さんなどと一緒にTBSを出てテレビマンユニオンを作った森健一さんです。あのワンシーンの中に放送人のDNAが含まれていると思います。

一人称が新鮮だったとお褒めいただいたのですが、これも田英夫さんの「ハノイの証言」や牛山純一さんの「南ベトナム海兵戦記」などから学んでいます。戦争という状況の中で抹殺されそうな個人、戦争という大スケールからみれば小さな生身の人間が一人称で語ることのインパクトを学びました。

震災が起こって、震災のスケールは物凄くて、個々人は圧倒されてしまう。そんな時にこそ生身の人間としての記者が一人称で自分の思いを語る。そこに意味があると思いました。

放送人の会の準グランプリを頂けるとご連絡を受けたときは飛び上がって喜びました。感謝したいのはまさにこちらなのです。後輩が先輩に感謝する、そんな番組を作りたいと思ってこの番組を作りました。

オムニバスという形を評価していただきましたが、最初はただの記者レポートの羅列ではないかとの批判がありました。それは制作者の側にもあって「こんなのでいいのか」「キャスターを設けよう」などの声もありました。そんなアイデアを私は全部しりぞけました。そんな発想の裏側には記者を信じない、素材の力を信じない、現場を信じない、そして小細工を使うという、この業界にありがちな方向があります。今回私はそれらを一切排除しました。結果的にあんな番組になりました。

司会者を置いたり、スタジオを開いたりしていたら私はこの場にいないでしょう。準グランプリに価するものは出来なかったでしょう。妥協しなくてよかった、といまは思っています。

一見手を抜いているようにみえて、噛めば味が出るするめのような番組をこれからも作っていこうと思っています。ご支援ください。

（拍手）

城谷厚司　栄えある賞をいただき有難うございます。

城谷厚司氏

受賞の電話を頂いたとき「斬新なヒロイン像でしたね」と言っていただきました。最初は朝ドラのヒロイン像を崩してやろうと思っていたのではなく、子どもの頃毎日わくわくしながら見ていた高揚感、一日一日が楽しみで、次はどうなるのだろう、次のヒロインはどんな人だろう、とわくわくしていた、あの感覚で見て欲しいという気持ちでした。いつの頃からかそんな見方をしなくなっていますが、それは何故かと考えました。

スタッフには朝ドラの視聴者は何かをしながら見ているのだから、同じ話を何回か繰り返さなくてはいけない、とか、そんな固定観念が出来ています。そうではなくて、ながら視聴ではなく、この15分間は仕事の手を止めて、ドラマをしっかり見て欲しい。そんな思いを伝えて渡辺あやさんに書いていただきました。

渡辺あやさんに「朝ドラ見てますか？」と聞きました。「見ています。何

本か見ましたが、途中で失速して後半を見なくなることが多かった」との返事です。途中失速しない、ちゃんと最後まで完結できるドラマにしよう、と思いました。

渡辺あやさんは連続ドラマは全く初めてで、朝ドラから最も遠い作家にみえます。そんな人と一から話し合って作ったドラマです。

今回は小篠綾子さんがモデルでしたが、他人の一生を描くのはほんとうにしんどい。やってみてつくづくそう思いました。特にヒロインが死ぬところを描くのはしんどい。それを渡辺さんは軽やかに着地してくれました。

渡辺さんは作品に向かって行く姿勢が実にすさまじい。「小篠綾子さんをモデルにするのなら、小篠綾子さんにひれ伏すようにすべてをその人生から学び取らなければならない」と常々言っていました。自我が崩壊するのではないかと心配もしましたが、全身全霊で飛び込んで行くことで初めて小篠綾子さんから学びとれるのだと半年間頑張りました。

半年間番組を明るく届けられてほんとうによかったと思っています。

ありがとうございました。

（拍手）

登坂琢磨　私は「深夜食堂」パート1のプロデューサーで1本だけ監督しました。竹園はパート2のプロデューサーです。2年前の仕事なので正直のところ戸惑っています。

毎日放送のドラマ班のことをちょっとお話します。

登坂琢磨氏

僕が最初にドラマ班に行ったころは「東芝日曜劇場」と「JDドラマボックス」という昼間15分の枠があり、「世界まるごとハウマッチ」が始まったころです。毎日放送のドラマ班は制作1部と呼ばれ、ゴールデンの連ドラの枠はなくなっていましたが、2時間の単発を年に2本か3本撮らされました。今野勉さんの「赤い稲妻・人見絹江物語」が放送されたのがその頃です。そんな時代もあったのですが私がやっとチーフ助監になったころ目標にしていた「東芝日曜劇場」は地方局ではできなくなりました。昼ドラだけ月金30分の帯が残りました。今から思うとスポンサーは固定していて、ドラマ班として年季を重ねると好きな企画ががとおり、監督もできたのですが、その枠すらいろんな事情でなくなったのが4年ほど前です。当時ドラマ班は8人ほどいて、TBSに出向していた竹園はそのままTBSで雇ってもらい、私は自力で深夜の枠をやりました。ドラマ班は解散してあちこちの番組に散りましたが、どこでも面倒がられました。バラエティーにはなじまず、鬱陶しがられる。どこへ行っても宙ぶらりんです。そのうち竹園が出向から編成に戻り、私もお金を出してくれるスポンサーを見つけたので「深夜食堂」を始めました。TBSに流す前は大阪ローカルの放送です。ほんとうはお金は全部集まってはいなかったのですが、無茶をして集まったことにして話を進めました。「深夜食堂」の原作は人気のマンガで各社から小学館へやらせて欲しいという話が殺到していたのですが、たまたまゴールデン街で原作者と飲む機会があり、小林薫さんがイメージだとの情報を得てプライオリティーがついたのだと思います。原作権が手に入りました。

MBSも自社のテレビドラマにMBSが出資するというのは初めてです。「それはどういうこと？民放は広告収入で番組を作るんじゃないの？」などいろんな疑問が出ましたが、RKBからの出資もあり、いろんなところからお金を集めて出来ました。

中身のクオリティーは集まってくださった松岡譲治監督とスタッフの功績だと思います。放送人としての私はどうすればいいかと必死にあがいただけです。震災以降、私は調子が悪くなり、上司に相談したら「じゃドキュメンタリーでもやるか？」と、今はドキュメンタリーをやっています。秋山さんの報道の魂で流してもらいました。

そんなこんなで、賞をいただき、とても励みになります。有難うございます。

（拍手）

島修一　MBSの島です。今、登坂の話を聞いて同じ会社の中にいろんなことがあるのだなあと、思います。

石井さんがおっしゃっていましたが、費用は内緒にしておいて欲しいのですが、ぶっちゃけたところ70万円です。自分で脚色しましたがそれはお金がなかったからです。作家にお願いする費用を惜しみました。

島修一氏

僕が一応代表になっていますが、功労者は何といっても二人の技術スタッフです。小池くんと効果の浜谷くんです。

（拍手）

二人はギャラなど度外視して、何日も徹夜をし、テレビのスタジオの空いている日を探してスタジオで大きな音を作り、そんな努力がこの番組の質につながりました。感謝しています。

NHKの「カーネーション」を制作された方がいらっしゃるので言いますが、実は制作時期がかぶっていて、ラジオドラマに出演していただいた在阪の俳優さんの多くは「カーネーション」にも出演しています。主要な役をある人にお願いしようと思っていたのですが、「カーネーション」に出演していてスケジュールがとれませんと断られ、他の方にお願いしたこともあります。結果的にはそれらはマイナスにはならずいい形で終わりました。

きたいと思います。よろしくお願いします。

（拍手）

石井　さっき言い忘れました。島さんはドラマだけ作っているのではありません。ふだんは「ありがとう浜村淳です」という月金のワイド番組のディレクターをずうっとやっています。その合間にドラマを作っているのです。ほんとうにいい番組でした。ＮＨＫで再放送しますので是非聞いてください。

堀川　今選考委員の河野さんと話をしていたのですが、今日の受賞者の言葉はほんとうに面白かったし、素晴らしかった。他の表彰式に私はいくつか出ていますが、こうはいきません。

制作の方が、増田さんはじめこれだけ親しみをこめ、お世辞でない、社交辞令でない言葉で語る授賞式はなかなかありません。私たちは非常に嬉しいのですが、選考委員の言葉が皆さんの心を解きほぐしたのかもしれません。素敵な制作者を選んで良かったなあ、と思います。

贈賞式会場にはＴＢＳのカメラが入った

懇親会スナップ

放送人の会総会

2012年度「放送人の会」総会は5月19日（土）午後2時から青山荘で「放送人グランプリ贈賞式」に先立って行われた。

名誉会長　川口幹夫、特別顧問　大山勝美、代表幹事　今野勉　に変更はなく、新幹事は田中秋夫、加藤滋紀、菅野高至の3氏。事業委員長は荻野慶人から渡辺紘史へ、広報委員長は松尾羊一から伊藤雅浩へそれぞれ交代になった。

2011年活動報告と2002年の活動方針、2011年度会計報告と2012年度予算案（左記）が満場一致で承認された。

新幹事紹介

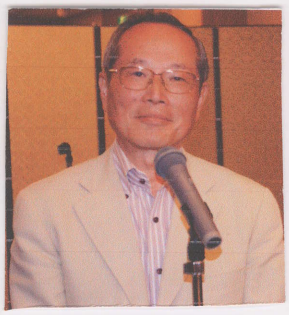
加藤滋紀　NHKでドキュメンタリーにかかわり、「おはようジャーナル」CPなどを経て大分放送局長。現在は放送番組向上協議会専務理事。

加藤滋紀氏

菅野高至　終始NHK時代劇に独自な作風を吹き込み、江戸市井ものを掘り起し、中でも一連の藤沢周平作品の「清左衛門残日録」や「蝉しぐれ」など〝海坂藩もの〟映像化での評価は高い。

菅野高至氏

田中秋夫　文化放送を経てNACK5（FMラジオ）で音楽ドキュメント「イムジン河2001」（民放連盟賞最優秀賞）「検証中津川フォークジャンボリー」（同ラジオ部門優秀賞）。同局の異色編成にかかわり、専務取締役。現在は日大芸術学部放送科講師。



田中秋夫氏

[2012年5月19日　第15回総会承認]

放送人の会 2011年度（平成23年度）会計報告

（2011年4月1日～2012年3月31日）

（単位：円）

1．前年度繰越金			6,768,430
2．2011年度収入		小計	4,725,181
会費・入会金	1,567,000		
共済事業契約金・各種助成金	3,000,000		
イベント関連収入	148,000		
寄付・利息その他	10,181		
3．2011年度支出		小計	6,122,469
一般管理費			2,993,364
事業費			3,129,105
4．2011年度」収支　（1＋2）－3			5,371,142
5．2011年度特別会計支出（日韓中ﾃﾚﾋﾞ制作者ﾌｫｰﾗﾑ in 札幌）			1,820,000
6．預金、現金残高			
普通預金（みずほ銀行赤坂）	783,577		
郵便振替証書残高	2,686,080		
現金	81,485		
7．次年度繰越金	3,551,142		

[特別会計・日韓中テレビ制作者フォーラム in 札幌]

8．特別会計収入	20,265,834
（JKA助成金ほか、当会分担金1,820千円含む）	
9．特別会計支出	19,111,735
10．特別会計収支差	1,154,099*

（* 収支差金の一部は、2008年度福岡大会の赤字返済に充当）

2012年度（平成24年度）予算

1．前年度繰越金（上記6）		3,551,142
2．収入		4,550,000
（会費・共済事業・助成金等）		
3．支出		6,900,000
一般管理費	3,600,000*	
（* 法人化準備経費含む）		
事業費	3,100,000	
予備費	200,000	
4．次年度繰越金（1＋2－3）		1,201,142

放送人の会幹事（2012－2013年度）

2012年5月

名誉会長　　川口幹夫
幹事・特別顧問　　大山勝美
代表幹事　　今野　勉

＜幹事＞（50音順）

雨宮望　石橋冠　石井彰　伊藤雅浩　荻野慶人　加賀美幸子　金平茂紀
北村充史　工藤英博　隈部紀生　小池勝次郎　桜井均　鈴木典之　曽根英二
武本宏一　長沼士朗　西川章　林健嗣　堀川とんこう　前川英樹　松尾羊一
村上雅通　山路家子　山田尚　渡辺紘史
◎田中秋夫　◎加藤滋紀　◎菅野高至
（◎印は新任。以上幹事計３０名）

＜各委員会＞（☆印はプロジェクト、○印はチーフ）

事業委員会……チーフ　渡辺紘史
☆放送人の証言　○工藤英博、隈部紀生、武本宏一、加藤滋紀、桜井均
☆名作の舞台裏　○渡辺紘史、石橋冠、雨宮望、
☆人気番組メモリー　○大山勝美、加賀美幸子、山路家子
☆放送人の世界　○今野勉、前川英樹、
☆ドキュメンタリー　○桜井均、小池勝次郎、鈴木典之
☆会員交流（放送人句会）○西川章、伊藤雅浩
☆地域交流　○村上雅通、林健嗣、曽根英二
☆日韓中ＴＶ制作者フォーラム
○山田尚、林健嗣、長沼士朗、渡辺紘史（顧問：河野尚行）

広報委員会……チーフ　伊藤雅浩
☆会報　○伊藤雅浩、鈴木典之、松尾羊一
☆ウェブサイト　○前川英樹、伊藤雅浩
☆ラジオプロジェクト　○松尾羊一、石井彰、田中秋夫

総務委員会……チーフ　北村充史
☆事務局担当　○北村充史
☆イベント記録　荻野慶人
☆放送人グランプリ　○堀川とんこう、北村充史
★法人プロジェクト　○工藤英博
★会則プロジェクト　○前川英樹

以上

「放送人の会」会則改訂に関する考え方

会則プロジェクト担当　前川英樹

5月19日の「放送人の会」総会で、幹事会に法人化プロジェクトと会則プロジェクトを設置することが承認されました。会則プロジェクト担当として、プロジェクト設置の趣旨と作業の方向について簡単に記しておきますので、ご理解を頂くとともに、ご意見のある方はお聞かせ頂きたいと思います。

『趣旨』

現状のままでは、「放送人の会」の最も重要なく人の集約>による活動の強化を図ることは困難であり、財務的にも厳しい状況を迎えるであろう。

そこで、メディア環境の急速な変化も視野に入れ、今後の会のあり方について検討し、その結果を会則に反映したい。

[会則改訂が求められる状況について]

① 当会のあり方を、急速に進展する放送環境の変化に対応したものにする。

放送が地上波と衛星による時代は過ぎて、有線放送（CATV）だけでなく、インターネットをインフラとするストリーミング型の情報配信が普及し、それらが相互に関係することにより、テレビのチャネルを変えることとウェッブ上でアクセスすることによる情報享受の相違がなくなりつつある。情報発信においても、既存テレビ局のような装置産業要素の強い巨大放送局から、カメラ1台、最小スタッフで映像を送り続ける極小規模サービスまで、多様な放送型サービスが成立している。こうした変化に対応できるように、会のあり方、会員の対象となる範囲を見直したい。

② 一方、昨年放送法が改正されたが、その最も基本的な要点は放送概念規定の変更である。法とは、状況の変化について最も遅れて対応するものであるが、その法においても放送についての考え方を改めたのである。

もともと放送法では、放送とは「公衆が直接受信することを目的とした無線による送信」とされていた。ところが、改正放送法では「無線」ではなく「電気通信による送信」と変更された。これが放送法改正の最大のポイントである。したがって、改正放送法では、無線系（地上波、BS、CS）、有線系（ケーブル、インターネット、etc）、などの技術的要件を問わず、電気信号により番組あるいは情報（広告を含む）を、受信者・享受者を特定せずに送ることを放送としている。例えば、スカパー多チャンネルや地デジを再送信しているオプチキャストは放送である。

③ 一方、リアルタイム・ストリーミングは、新放送法制においても<受信者の希望（アクセス）によってコンテンツが送信される>ため、通信に区分される。しかし、ニコニコ生放送やユーストリームを見る人々にとって、その制度上の区分が通信か放送かということはほとんど意味がない。むしろ放送型サービスの分野が一層拡張していると考えた方が良い。

④ このように〝放送人〟が活動する場は広がり、新しく放送に関わる人々が登場しつつある。「放送人の会」も、こうした時代の中で新たな活動を行うために、会員のあり方、会員の資格を大胆に変更する必要がある。

⑤ こうしたメディア環境変化に対応するとともに、「放送人」の幅を広げ、番組制作だけでなく、より広く放送に関わる人々を会員の対象にするように会則の見直しを行いたい。

例えば、放送局経営、編成、営業など制作・報道以外の放送関係者、批評家、学者・研究者、情報技術関係のエンジニア、メディア関係のジャーナリスト、広告関係者（クライアント、エージェント、CM批評・研究者、など）、ウェッブ関係者、放送に関わるアーティスト・クリエイター（俳優、音楽関係、文芸家、など）で放送に関心のある人々が容易に参加できるようにしたい。

⑥ 以上のようなな方向に会の形を整えることで、会員の対象を広げ、当会の裾野を広げ、時代に即応した活動を拡充するとともに、財務基盤を強化し会の運営の安定化を目指したい。

[作業の方向]

① そのためには、新しい会員の入会についても新しい方法を考えたい。具体的には、入会希望者を待つのではなく、会員として活動して欲しい人を会員が積極的に推薦し、入会を要請する仕組みなどを検討したい。

② また、会員の種類、会費のあり方も併せて検討したい。

③ 関連して役員についての規定の見直しも検討することとしたい。

④ これらの作業は、<法人化>対応に関わるものであるため、法人化プロジェクトと連携しつつさらに会則全般を整備することにしたい。

⑤ 以上の方向が明らかにすることにより、「放送人の会」の存在が旧来の放送関係分野を超えて認知度が高まり、関心を持つ人々が増えるであろうと考えられる。

以上を踏まえて、「入会の呼びかけ」「会員の種類と会費のあり方」及び「役員のあり方」についても会則の改訂を検討する。

尚、当会がこうした方向を選択した場合、例えば以下の点にどう対応するかは重要なテーマである（他にもまだ多くの論

点が生ずるであろう）。

1．インターネット上のストリーミング配信による放送サービス分野について、当会としてどのような活動が想定されるか。

2．このような活動は、いわゆる「番組」を放送するのとは違う情報発信（及びリアクション）の形であるため、例えば「放送人グランプリ」などでどのような評価・選考活動がありうるか。

3．ここで掲げた検討作業により、新たな会として活動が行われるとして、従来から積み重ねてきた当会の多様な活動とどのように関係するのか。相互に負の反応に陥らないために、どう対応するか。

以上については、まさに具体的にどのような事象が発生するか、それに応じて議論されるべきで、前もって懸念材料の列挙に陥ることは好ましくないことは言うまでもない。

但し、原則的に組織の拡張は求心力と相反しがちだということだけは承知しておくべきだろう。この場合、求心力とはヒエラルキーの頂点をイメージするのではなく、活動が多中心的であっても、それぞれに求心力が働けば、会全体は活性化する、と考えたい。

そのような想定で、会則を改訂し、新しい「放送人の会」を創出したい。

会則改訂作業についてのご意見のある方は、事務局内「会則プロジェクト」宛に、文書、ＦＡＸ、メールでお寄せください。

□

参考：現会則の会員及び役員に関する規定は以下のとおりである。

第4条（会員資格）　放送にかかわる人、および放送文化に深い関心を持つ人で、本会の目的に賛同する個人。

第5条（入会）入会希望者は、入会申込書を代表幹事あてに提出し、幹事会の承認を得なければならない。

第6条（入会金及び会費）本会の入会金、年会費は、総会で別に定める。

第7条（退会）会員が退会する場合は、退会届を代表幹事あてに提出しなければならない。

第8条（役員）　本会に次の役員をおく。

1．名誉会長　　1名

2．代表幹事　　1名

3．幹事　　22名以上30名以内

第9条（役員の選任）名誉会長及び幹事は総会でこれを選任し、幹事は互選で代表幹事を定める。必要に応じて副代表幹事をおくことができる。

第10条（幹事の職務）代表幹事は本会の業務を統括し、本会を代表する。

2．幹事は幹事会を組織してこの会則に定める業務のほか、本会総会の権限に委ねられた事項以外の事項を議決し、執行する。

札幌から

「アジア旅番組国際グランプリ2012」開催のお知らせ

開催日時　２０１２年１０月１４日（日）～１７（水）　４日間

場　所　新千歳じゃがポックルシアター＆札幌駅前地下歩行空間

参加予定国・地域　中国、韓国、台湾、香港、タイ、ベトナム、シンガポール、マレーシア、フィリピン、インド、カタール、オーストリア、ドバイ、カンボジャ、ネパール

参加作品数　５０作品

実行委員長　今野　勉

事務局長　林　健嗣

実行部隊　実行委員会スタッフ８名（札幌）

主催　アジア旅番組国際グランプリ実行委員会
北海道、札幌市、北海道空港、ジャパンフィルムコミッション、
ＪＴＢ北海道、放送人の会

＊２０１３年度は、中国で開催。日韓中テレビ制作者フォーラム後に開催地の近くで開催検討中。

第32回・名作の舞台裏

12年4月21日(土) 横浜情文ホール

鈴木先生 (テレビ東京)

(2011年4月～6月放送)

パネリスト

長谷川博己(鈴木先生役)

山鹿 達也 (テレビ東京P)

河合 勇人 (演出)

古沢 良太(脚本)

司会 石橋 冠 (放送人の会)

かつて「先生デモやるか」「先生シカなれない」無気力先生をデモシカ先生と揶揄し、そのうち「デモしかやれない」労働者先生をそう呼んだ。やがて停滞した教育現場に父兄が求めたのが「3年B組金八先生」の坂本金八(武田鉄矢)であり、「熱中時代」の北野広大(水谷豊)という熱血タイプのヒーロー像であった。

「**鈴木先生**」は問題児中心に進行する風俗的な学園ドラマの定番とは違う。生徒間の人間心理、教職員同士のからみ、生徒と教師の微妙な人間関係を鈴木先生の内面を通して描く。学園の組織も実は一般社会の人間関係とは無関係ではなく、正解はないというユニークな視点が注目を呼んだドラマ。

会場はコア・ファンの若い女性の姿が圧倒的に多く、いつもの「名作」サロンにはない華やかな雰囲気が漂っていたのが印象的だった。

石橋「原作の劇画も読み、ドラマもすべて目を通しましたが『鈴木先生』の着地点は学園ドラマとか青春ドラマの概念を変える作品で、民間放送連盟賞ドラマ部門優秀賞、ギャラクシー月間賞を獲得し、ドラマ業界の反響などが大きい割りに低視聴率は問題になったのでは?」

山鹿達也氏

山鹿「ヒトケタでも3%以下。散々でした。あまりの低さでかえって開き直り、作品の出来に集中したのがよかった。負け惜しみじゃありませんが」(笑い)

古沢「予想を上回る低さ!でも局は何にも文句を言わない。自由にやってくれと。なら内容に賭けるしかない。

石橋「『セカンド・バージン』(NHK)で注目され、『家政婦のミタ』が40・0%を稼いで『鈴木先生』は平均視聴率2・1(会場笑う)この落差に長谷川さんどうでした?」

長谷川博己氏

長谷川「劇団出身(文学座)で数字にはあまり関心はなかったがショックでした。もう仕事こないな」(爆笑)

石橋「本題に入って、ねらいは?」

古沢「教室には社会の縮図みたいな人間関係がある。原作の硬い台詞を引き算でなく足し算で積み重ねよう、あとは演出におまかせして」

河合勇人氏

河合「給食の酢豚が不評で余す子が多いけど好きな子もいてアンケートで決めよう。鈴木先生はそこにこだわる。およそ教育のテーマではない教室の日常に深入りする。瑣末な問題にドラマがどう耐え、面白さを引き出すか」

古沢「今の生徒は醒めてる。その怖さの内面にこだわったり、熱血先生をヒーローにしたりヤンキー風なワルを誇張したりしない。あくまで鈴木先生の理想と妄想に賭けました」

古沢良太氏

石橋「最後に会場の皆さんから質問を受けましょう…あなた」

石橋冠氏

女性「極端なレイプ問題で始まり抵抗を感じたが、娘と見ているうちに教室の日常性を問題視するテーマが新鮮でファンになりました」

石橋「放送人の会から堀川さん」

堀川とんこう「ディベートが苦手な日本人はドラマでも情緒的な解決に逃げ込みがちでわれわれも反省するが、このドラマは先生と生徒の関係の基本に論争を持ち込み成功した。サンデル教授や若手の論客による『日本のジレンマ』が注目される中、金八的でない論理的な解決を学園に持ち込んだ知的ドラマを高く評価したい」

石橋「名作とは過去の作品だけでもなく、また必ずしも視聴率に比例しない。『鈴木先生』を取り上げてその感を深くしました」

超低空視聴率ながら最後まで続行した「鈴木先生」は、芸術祭や放送文化基金賞を獲得、DVD化、秋には映画化される。最近、連ドラ「家族のうた」「クレオパトラな女たち」が低視聴率ゆえに回数短縮となった由。考えさせられるものがある。

(構成 松尾)

第9回　人気番組メモリー

12年3月24日(土)　横浜情文ホール

ザ・ベストテン

（TBS・1978～1990年放送）

ゲスト

生島ヒロシ（追っかけマン、司会）

山田修爾（制作）

遠藤　環（演出）

司会

吉川美代子（TBSアナウンサー）

今回は番組の一部を断片的にいくつも見せては語る形で、映像は「これぞテレビ！」と言いたい面白さ。発言は早い者勝ち、順不同、山ほどのエピソードが語られた。

x　番組は1978年11月から始まるが、企画は77年、連休明けに10月スタートと思って出した。先輩の企画に負けて1年開始は遅れた。コンセプトは①視聴者の投票による歌のランキング②全部生放送、の2点。視聴者からの葉書は何万通と来た。最高は1週17万通。葉書の整理は土・日に10人でやった。

y　それまでの番組は、業界勢力図があって、こいつが入ってなきゃおかしいから、とランキングは適当につけていた。黒柳さんは「ランキングが公正」というのが出演の条件だった。

z　3週目に山口百恵が11位になって、ベストテンからはずれた。10位が野口五郎。百恵はほりプロ。大手のプロダクションからの苦情は初期にはあったが、全部はねのけた。

x　タノキンはまだで、百恵、桜田淳子、森昌子、野口五郎、西郷輝彦、森進一、澤田研二、アリスなどの時代。やがてツイスト、サザンが出てきて、五木ひろしが歌謡曲の主軸になり、松田聖子、タノキンが出てくる。混在する頃が楽しかった。

y　そして、この番組に出るとあっという間に人気がでた。

z　視聴率があがって、評判がいいので諏訪社長に社長賞を出してくれといったが、予算が年間1億円オーバー。赤字番組に賞は出せないと言われた。中継や海外ロケでお金がかかった。当時のロケは大変で、たとえば苗場からだと三段中継。一度山の上に上げ、池袋サンシャインの屋上から赤坂へつないだ。山の中、寒空や雪の中の中継は大変で、スタッフも大人数、セットにもこった。

x　セットは最初地味で、生で見せればいいと思っていたが、やってみるとだんだん色気がでてくる。Dは4人、順番で、Dの個性がセットに出る。

y　遠藤は奇才と呼ばれていた。変な和尚が意味なく山門に立っていたり、山本譲二をふんどし姿にしたり、奇才でなくてはやらない。

z　火曜日にその週でなく次の週のランキングが決定する。それから10日間、15畳くらいの会議室で、どんな中継にするか、1位のお祝いは、などと朝の4時頃まで議論した。

x　回転して出演者がさかさまにうつる映像は、フレッド・アステアの映画のワンシーンを真似したものだが、マイクのコードを引っ張る美術のスタッフがいた。マイクスタンドに巻きつけるより引っ張った方がマジックめいて不思議で面白い。

y　松田聖子の20歳の誕生日にはシャンパングラスのタワーを作った。バブルの時代だ。150円のグラスを瞬間接着剤でくっつけて、2500個。

z　日テレの生田スタジオでのしぶがき隊取材は「話が通っていない」と追い出された。

x　新幹線の駅での中継はタレントのスケジュール、時刻表、月齢の暦を見比べて、タレントが新幹線を飛び下りるとすぐ始めた。列車を停めたことはない。静岡放送のアナが「JRがよく許可してくれたものだ」と言った。

y　3分の歌のために地方局にでかい中継車を出させる説得は大変だった。しかし番組がうまく廻り始めると「うちの局でもやりたい」となった。

z　東名インターを下りて静岡放送の玄関までタクシーで3,500円。領収書を受け取るところもちゃんと映す。

x　おかげでカメラ割りの段取りはメチャクチャ。

y　マッチ（近藤真彦）が車の上に立って歌うのを車から生中継するのを警視庁はよく許したね。

z　旭川市民会館の松山千春はひどかった。3分の約束が、今まで出なかったことのお詫びを喋って8分。おかげで山口百恵は歌う時間がなくなった。

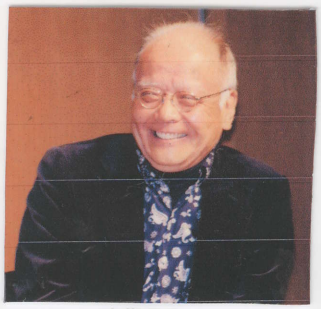
―以下、省略―

黒柳徹子からのメッセージ

私たちは楽しくてワクワクしながら作ったから最高に幸せでした。今でもベストテンの出演者に会うと同窓会のように抱き合って「懐かしいねー」と言い合います。年齢も何も関係なく命がけで本番やった仲間ですから。本当にザ・ベストテンはそういう不思議なくらいみんなの気持ちが一つになった番組だったのです。

生島ヒロシ氏

山田修爾氏



遠藤環氏

吉川美代子氏

ラジオのページ ⑩

揺籃期のラジオと寺田寅彦

武本宏一

日本のラジオが産声をあげたのは大正14年（1925年）。

来年はテレビ60周年などと騒いでいるが、ラジオの方は来年で88年、つまり米寿を迎える。

本当なら、かくも生き永らえてきた強力メディアとして、大いに祝われて然るべきところだが、どっこい昨今のラジオはすっかり萎びてしまったように見える。

たとえば1年前の平成23年4月には、辛うじて7%を保っていた聴取率は、今年平成24年4月には何と1%も下がって、6・2%（12歳～ 69歳平均）になってしまった。

聴取率だけではない。ラジオ各局の実入りも下げ止まらない。

ピーク時の平成3年（1991年）には、2、406億円あったラジオ広告費は、平成23年（2011年）には約半分の1、247億円にまで越智こんでしまった。

こうなると、中にはつぶれる局も出たり、あるいは合併などによるラジオ局の大再編も現実のものになるかもしれない。

お先真っ暗な、時代遅れのメディアにも見えるラジオだが、ここでひとつ、ラジオがまだ若かった頃、というよりは産声をあげたばかりの昭和6年（1931年）に発表された、興味ある随筆を紹介してみよう。

かの、科学者にして文学者でもあった寺田寅彦（1878～1935）が、随筆「ラジオ・モンタージュ」の中で、ラジオの大いなる可能性を論じているのだ。(注)

彼は先ず、エイゼンシュタインらによって試みられた映画のモンタージュについて語り、ついで要旨次のように述べる。

「モンタージュ技法は、メディアが何であっても可能である。ラジオに於いても、音響放送の素材の適当な組み合わせや配列によって、一種の美術的モンタージュ放送を創作することが充分可能だろう。」

たとえば、と寺田は具体的な例を示す。

「たとえばフランスがナポレオンの記念祭に現大統領が演説したりする際に、もしも本物のナポレオンの声や、ウォータールーの砲声や、セントヘレナの波の音などが適当に挿入されたとしたら、それは実に不思議な印象を与えるであろう。」

このように、日本を代表するエッセイストである寺田は、ラジオが誕生して僅か7年のこの時代に、今も私を興奮させてやまない斬新な試みを提示しているのだ。

いま活路を求めてパソコンのインターネットに進出し、radicoをはじめLISMO WAVE、ドコモFM、らじるらじる（NHK）など新しいインフラ上で展開を始めた現代のラジオ…。もし寺田が現存していたら、どのような試案を発表してくれるだろう。

苦境に落ち込んだ今こそ、若いラジオマンは思考停止から抜け出し、新しいチャンスを生かすべきであろう。

注・岩波文庫〝寺田寅彦随筆集〟第3巻参照）

▼前号でラジオのページの回数を9回のところ8回と間違えました。今号で10回です。

「放送屋」から「放送人」へ

田中秋夫

10年前2002年の「放送人の会」会報（NO 13号）の「ラジオの現場から」という欄に文章を求められ次のように書いた。「1960年代に文化放送の広報誌に寄稿された京大人文研の加藤秀俊さんが『新聞人という言葉は存在するが、放送人という表現は未だ存在するとは言い難い』と書かれていた。私は果たして自分が放送人の名に価するか自信が持てないでいる」と。

しかし、その後2010年にこの会報（NO 47号）で代表幹事の今野さんが「放送人という言葉を作った人」として同じ京大人文研の梅棹忠夫さんのエピソードを紹介されていて大変興味深く読ませていただいた。「梅棹さんは1961年に放送人という表現を使った」とある。

同じ時代の京大人文研の研究者同士で異論を唱えていたことになる。加藤さんは「OO人」という言葉に「権威」的ニュアンスを込めていたと思われるが、梅棹さんは単なる「職業集団」の放送界の人として「放送人」という表現を使ったと思われる。だとするならば私が躊躇することは意味が無かったことになる。「放送マン」という表現と同じだと受け取れば良いのだろう。

新聞業界の人を呼ぶ時に「新聞人」という表現とは別に侮蔑的ニュアンスを込めた「ブンヤ」「新聞屋」という表現もある。自社の新聞をより多く売る為に事実を誇張してセンセーショナルな記事を書く記者たちを呼ぶ時に使う。

むしろ今では世間一般に「新聞人」より「ブンヤ」の表現の方が多いと思われる。その対語として「放送屋」という表現が生まれているように思う。今やテレビ・ラジオを含め放送界に対して視聴者の不満はかなり充満しているのではないだろうか？

視聴率競争が激化した結果、民放各局とも「一望の荒野」的編成になっているのが現状である。何処にチャンネルを回しても同じようなタレントが出演し、同じような企画の番組が放送されている。さらに報道番組に於ける世論操作的な論調にも批判が強まっているように思える。まして原発事故が起こる以前に放送界はその危険性をどれだけ警鐘を鳴らしていただろうか？やはりスポンサーである電力会社に対するアンタッチャブルの風潮があり、「安全キャンペー

ン」の片棒を担いだのではなかったか？3・11以後ますます「放送屋」に対する風当たりは強まっている気がする。

代表幹事今野さんが会報（No 31）に書かれた文によれば「放送人の会」が出来た契機となったのが1997年当時のTV界に於ける「やらせ問題」だったという。当時の視聴者や他のメディアからの糾弾は熾烈を極めた。それに対して放送業界の制作者たちが衿持を保つ為に結成されたのがこの会だとある。その意味ではこの会の果たす役割はますます重要になりつつあると感じている。

「放送屋から放送人へ」が今求められている。

日韓中テレビ制作者フォーラム
韓国・慶州大会のご案内

今年も最近、日韓中テレビ制作者フォーラムの今年の大会を韓国の慶州市で行うことが決まりました。

昨年は札幌市で第11回のフォーラムが行われ、3国のテレビ関係者が日本の大震災について語り合うなど、印象深い大会であったことが思い出されます。

このフォーラムは、今世紀の初頭に日本と韓国のテレビ制作者が福岡と釜山を結ぶフェリー船上で議論を交わしたのをスタートに、2004年には中国も参加し、以来各国持ち回りで、毎年3国のテレビ制作者がお互いの作品を持ち寄り、作品の鑑賞と交流を深めてきたもので、現在日本の実行委員会は放送人の会が担当しています。

今年は第12回のフォーラムとなり、先日の準備会議でその概要が次のように決まりました。

日程 2012年10月11日～14日

開催場所 韓国慶州市 慶州ドリームセンター

大会のテーマ 歴史のなかの人間

参加作品 各国4作品・テーマ作品1・自由作品 ドキュメンタリー、ドラマ、エンターテインメント 各1

大会の行われる慶州市は東は日本海に面し、昔は新羅王国の都であり、日本で言えば奈良や京都にあたる韓国の古都です。そのため世界遺産など歴史的な遺跡も多く残されています

フォーラムでは、各国参加の作品鑑賞や討論、テーマに関するセミナーなどが予定されており、特に今年は各ジャンル別の討論にも力を入れることになりました。

こうした取り組みを通して、今年のフォーラムも、三国のテレビ関係者の現在の関心事や、各国の最新の番組制作事情などを知る格好の場所になることが期待されます。

毎年放送人の会では会員の皆さんのフォーラム参加を呼びかけていますが、今年も8月ごろに改めて参加者の募集を行うことにしています。どうぞふるってご参加下さい。（フォーラム事務局）

いろはに時代劇～その壱～

菅野高至

思えば、若気の至りだが、実は、時代劇が嫌いだった。時代劇では人がよく死ぬ。殴り合いや殺し合いがある。血も流れる。出来れば見たくないし、見せたくもないと思っていた。

そもそも血は苦手で、血圧が低いゆえか、健康診断の採血でも、時に失神する。だから、「椿三十郎」の仲代達矢の鮮血シーンなどは、作り物だと分かっていても、目を瞑っていた。

その上、時代劇となると、なぜか役者の芝居が大きくなる。型にもはまりがちとなる。絵空事の世界はテレビ的ではないようだと、考えていた。テレビはナマでリアルだと思っていた。

5年の地方勤務を経て、ドラマ部に上がった75年の秋から2年3か月、大河ドラマ「元禄太平記」「風と雲と虹と」「花神」で、フロアーを這い回り、ドラマの基礎を学ぶ。

だが、その後は時代劇とぷっつり縁が切れて、これ幸いと企画も考えなかった。30代半ばで、大河の台本を兼ねて演出に入るよう誘われるが、不遜にも脚本家と合わない、喧嘩になると断って、即、転勤候補となる。暫し干されるも、拾う神がいて、なんとか首が繋がる。

そんな私にも、ついに時代劇の制作が回って来る。'92年（平成4）の初夏、「次年度の一話完結・連続時代劇を企画せよ」と、部長のご下命が下る。慌てて読みまくり、みんなの知恵も借りて、原作を二つ選ぶ。2シリーズ計40本弱を想定し、平岩弓枝さんの『はやぶさ新八御用帳』と、藤沢周平さんの『三屋清左衛門残日録』に決める。『清左衛門～』は当時サラリーマンの間で「雪の夜の彼と彼女は、ちゃんと致したのか、致さなかったのか？」と話題になった。放送の並びは、女性ファンが多い平岩さんを4月期首にして、金曜枠の定着を狙い、渋い清左衛門は冬1月からの放送と考えていた。

脚本は、三年越しの恋が実り、竹山洋さんに決まる。実は、竹山さんとは大阪局で、'90年の単発ドラマを作る予定が、急遽、彼が朝ドラに呼ばれ、私は失恋したという過去があった。因みに、その朝ドラは「京ふたり」である。

ホンの次は役者だが、肝心な「はやぶさ～」の主役がなかなか決まらない。もう時効だから（？）明かすと、意中の人は28歳の中村橋之助さんだった。だが、粘ったあげく松竹に「当分の間、歌舞伎に専念させる」と断られた。

橋之助さんとは、それから十年後の「御宿かわせみ」で、漸く想いを遂げる。

と、突然、急展開する。「清左衛門～」が4月期首の放送なら、仲代達矢さんのスケジュールがOKだとの情報が届き、時代劇ビギナーの制作と脚本家の暗中模索の旅が始まる。（つづく）

会員をふやそう 放送を愛し励ます放送人の会もそろそろ世代交代の兆し。いきのいい若年寄の皆さんを物色、勧誘する一声運動をやりましょう。

第32回放送人句会

◇平成24年5月9日（水）◇於…麦屋
◇選者…星野高士
◇出席…伊藤視郎、上村暁蛙、豊田まつり、新村もとを、橋本きよし、林備後、細川直子、松尾馬笑、森治美、西川阿舟（11名）　◇不在投句…荻野慶人
◇兼題…祭、筍、立稽古、当季雑詠

【星野高士特選】
わけありて人を縫ひゆく祭かな　治美
たかんなの雨に研がれてゆく未来　備後
筍が好きといふひとばかり居て　備後
祭衣着て鳩に餌をやる男　阿舟
家を出た息子戻りて夏祭　暁蛙
立ち稽古終へて踏み出す五月闇　治美
母の日を母にもならず迎へけり　治美
改札も佐原囃子の中にあり　きよし

【星野高士選】
扇風機時折止まる立ち稽古　もとを
立稽古仕切る座長の古扇　備後
雨もまた降り注ぐもの若緑　直子
老鶯や本読みなしの立稽古　阿舟
駄目出しは降る雹のごと立稽古　備後
筍や腸（はら）の具合のいとよろし　阿舟
夕焼けに身を任せをり海の涯　治美
ほんたうはひとりを思ふ祭衣　まつり
海峡は八重潮いまぞ泳ぎ渡御　阿舟
宮神輿巡行を待つ佃島　備後
庭先に江の電停まる楠若葉　きよし
竹の子の刺身某クラブにて　まつり
祭笛曳き手下れる飾り船　もとを
にきび顔祭の烏帽子つけており　視郎
本離し浴衣の主役立稽古　まつり
立ち稽古踏むや白足袋青畳　きよし
香水の香りほのかな立稽古　視郎
故郷へ帰り祭りの笛を吹く　視郎
竹寺の筍飯は小ぶりなり　視郎
筍の定期便来る母の里　治美
夏祭り竹馬の友の老いにけり　馬笑
浴衣着て端に待たされ立ち稽古　もとを
夏祭寅次郎去り十五年　暁蛙
くったくを胸にしぶしぶ祭びと　まつり
禅寺の筍供養雨もよひ　暁蛙
筍や京の便りの匂ひ乗せ　馬笑
わた飴の絹目の先に神輿見ゆ　馬笑
夏祭り長き昭和の色滲む　暁蛙
船渡御や川面に映ゆる六三四塔（むさし）　馬笑

【会員互選】
球飛んで大当りなりたけのこの　直子
祭囃子日がな一日落着かず　阿舟
風鈴が小さく鳴つて祭あと　きよし
けはひしてふり返れば紅牡丹　直子
肌さはるものを木綿に夏初め　まつり
化粧して祭の稚児の鎮まりぬ　備後
竹の子や巣立ちの子らもあちこちに　馬笑
筍の細きを選ぶ老世帯　暁蛙
若竹煮待ち人いずこ苦い味　慶人
あまりにもあとの祭りの多すぎて　慶人
丁寧に着物を脱がす筍の　治美

【選者吟】　高士
浅草の筍飯の焦げ目かな
たかんなの呼ぶ晴れ際と雨雲と
今半の肉の厚みも祭前
立稽古まつり太鼓は遠くより
筍の土の湿りにある活気
立稽古終り祭りの人となる
祭髪結ひてどこへも行かざりし

次回放送人句会
◇7月11日（水）19・00投句締切
◇於…赤坂・麦屋（Fax03-3586-0056）
◇兼題…晩夏、夏館、氷水、脇役（夏の季語を入れて）

新会員紹介

鈴木嘉一　読売新聞芸能部で制作現場を見据えた記者活動で知られ、その集大成である名著「テレビ番組の40年」や「大河ドラマの50年」を出版、硬直した放送評論臭にない独自な放送観の持ち主。埼玉大講師。定年を機に入会。

黛りんたろう　78年NHK入局。終始ドラマ畑に専念、鮨職人を題材に「イキのいい奴」で小林薫を売り出し、「うさぎの休日」大河「花の乱」水曜ドラマ「鏡花の眠らない」朝ドラ「すずらん」など。劇場映画「RAMPO」（監督・脚本）が話題を呼んだ。

鉄になる日

受賞したラジオドラマ「鉄になる日」（毎日放送）のCDは事務局にあります。なおNHK（第1）では《今年のベストラジオ》として6月17日、24日の両日曜（16時～17時）に今年度NHK、民放のラジオドラマ受賞作品をまとめて特集します。

訂正

「会報」前号「下馬評座談会の中にミスプリントがあります。お詫びして左記のように訂正します。
☆4ページ、3段目Aの項、傍線部分が脱落しています。
A　歴史的視座で日本と中国の深い人的交流を立証した3回シリーズ「辛亥革命100年」（11月、NHK）は、国の自立と人間の気概や情熱の在り処を熱く問う。同じNHKの「日本は何を考えて来たのか」（4回シリーズ、1月）は、作り手が近代の〝思想史番組〟と自称する珍しく壮大なスケールの教養番組だ。

HP

ホームページのブログの欄へのご投稿は事務局、担当の前川、伊藤のどちらかへご連絡ください。すぐ入力します。

会員消息

荻野慶人さんたち、かつて宝塚映画で映画作りに励んだ人たちが昔を偲んで一冊の本を作った…

わが青春の宝塚映画

「大劇場を北端にして東南に広がる宝塚ファミリーランドは、戦前から阪神パークと並ぶ賑わいを見せていて、動物園と植物園を通り抜けた東南端に撮影所があった」。1952年（昭和27）に宝塚映画製作所は再開された。近所に生家がある早大生の映画青年 荻野慶人 は「使い走りでいいからアルバイトに雇って欲しかった」と撮影所長に頼み込み、助監督のアシスタント生活がはじまった…

東宝は戦前に東京発声映画製作所（後の新東宝）を作り「若い人」「小島の春」など傑作を出した。宝塚映画も東宝系の関西の拠点で宝塚のスターや関西の歌舞伎役者を起用し、娯楽作品を中心に「暖簾」「小早川家の秋」「お吟さま」などの傑作も作るが世はテレビの時代になり、荻野青年も読賣テレビに移籍して、独自な風格をもつ「大阪もの」ドラマの演出で主流を形成、今東光や藤本義一、山崎豊子など関西文壇に中村扇雀や扇千景、中村玉緒などの上方役者による連ドラを作り続ける。カツドウヤ気質が量産を支えていた一時期の映画の青春がかいまみえる書である。私家判ゆえ一冊を事務局に贈答して戴きました。（M）

新刊紹介

「僕のNHK物語」

冨沢 満著

「そういえば、工藤敏樹CPが亡くなって二〇年、小倉一郎CPが亡くなって丸三年になる。いいお酒の人たちだった。仕事も素晴らしかった」と記す。過去の業績を内ち向きに刻印する類いの書ではない。

ラジオの録音構成ではデンスケを肩に、テレビのドキュメンタリーはビデオ撮影以前だから専らノイズレスカメラのエクレール（写真参照）が中心のフィルム編集の時代だ。

冨沢は一九五四年、NHKに入局してまず函館支局へ。後年、酒を愛した先輩の工藤敏樹が函館を訪ねた際「あそこはスリ鉢のような街で、飲んでると、はまり込んでしまって、這い出られなくなる。困ったような、いい気持ちにさせる港町だ」と言ったという。

いわゆる「兵隊」時代で酌み交わす交友の挿話、企画を考える付き合い酒から取材が一段落すれば酒。行きつけの飲み屋に出入りする仲間を描写する。

NHKという巨大な現場組織と民放の違いは入局すれば、まず地方支局に派遣され、新人PDいわばインターンとして力量が試される季節があることだ。まず、函館支局に赴任した冨沢満は「当時番組は、道南函館をカバーするローカル放送、北海道全域の管中放送、そして日本全国の全中の三段階に分かれ（中略）ローカルや管中をおろそかにするということではないが、僕はラジオでもテレビでも全中と呼ばれる全国放送に憧れた」と回想する。

やがて支局暮らしも終え、東京総局へ。「日本の素顔　奇病のかげに～水俣からの報告」で注目を浴びた小倉一郎がヒューマン・ドキュメント枠「ある人生」を立ちあげたころで小倉チーム、通称「小倉学校」には山崎俊一、工藤敏樹、相田洋、龍村仁、カメラに葛城哲郎などがいて鍛えられたころだった。そのころのんべえ横町の酒場「ぶる」は園山俊二や演劇の小田島雄志などを除けば常連はNHKのPDやカメラマンたちで、管理職は入れない方針の店だったという。出入りを許されれば「ところで、次は何やるの？」と上司の工藤が待ち構えている。ゴールデン街も含め紫煙もうもうの酒場から企画が立ちのぼる。70年代はドキュメンタリーの時代でもあった。

同時代史的な、意図的な主語のない文体が心地よい。「センターのない構図」（小倉一郎）による肉感的ドキュメンタリー証言史でもある書だ。

＝バジリコ社　一八〇〇円＝　（松尾）

業界夜話

回数短縮たぁなんだ！

春クールの連続ドラマ「家族のうた」と「クレオパトラな女たち」の2本が突然予定回数を減らして店じまいするって。昔は視聴率低迷で連ドラ中断の暴挙はよくあったが、さすがに打ち切りはマズイから回数短縮という姑息な手段にでたらしいのだが、ちょっと待ってくれ！

コース料理で客が料理に手をつけないからと言って皿ごと取り上げたり、皿数を減らすようなレストランは確実に潰れるが、テレビ料理は社長が人ごとのように「あの料理はまずいので…」と言い訳をすれば一件落着するのか。料理を司ったシェフの立場はどうなるのだ。連ドラは5回以降が面白いかどうかの正念場で作家も演出も「そろそろメーン・ディッシュの出番だ」と腕によりをかける。回数短縮とはメーン・ディッシュの出ないディナーだ。「金返せ！」いや無駄にした「時間を返せ！」と叫びたい。くせのある性格俳優や独特なレシピで評判の脚本家は、まずオードブルで客を試すシェフに似て、料理人と客の駆け引きあってのドラマだ。どぎつい田舎料理かチェーン店ばかりの当節にしても舌の肥えた客をなめちゃいけない。

今や週一回テレビの前で待っているなどという悠長な視聴者はいない。録画で溜めて一挙に見るコア・ファンが多い。彼らが吹聴し裾野は広がる。視聴率X録画率の時代なのだ。

会員名簿

2012.05.31 現在

【あ】青木裕子　赤井朱美　秋田完　秋山豊寛　雨宮望　新井和子　【い】石井彰　石井清司　石井ふく子　石高健次　石橋冠　磯野恭子　磯村健二　市岡康子　市村元　一色伸夫　伊藤雅浩　井上良介　今井義典　岩澤敏　【う】上村忠　碓井広義　臼杵敬子　歌田勝彦　宇野昭　【え】江口展之　遠藤利男　遠藤ふき子　遠藤雅充　【お】大蔵雄之助　太田敬雄　大西康司　大西文一郎　大原れいこ　大山勝美　大類啓　大脇明　岡弘道　岡田晋吉　緒方陽一　岡村黎明　小河原正巳　沖野瞭　荻野慶人　小田久榮門　織田晃之祐　【か】加賀美幸子　各務孝　片岡敬司　勝部領樹　葛城哲郎　加藤滋紀　加藤辿　加藤義人　金沢敏子　金子登起世　兼歳正英　金平茂紀　加納孝夫　鎌内啓子　上安平洌子　鴨下信一　川口健一　川口幹夫　河村正一　【き】岸田功　北川泰三　北川信　北出晃　北村美憲　北村充史　木村成忠　【く】楠美昌　工藤英博　久保志穂　隈部紀生　【こ】小池勝次郎　河野尚行　児玉久男　後藤和晃　小南武朗　近藤晋　今野勉　【さ】斉藤伸久　斉藤秀夫　斎明寺以玖子　酒井美樹男　寒河江正　坂元良江　桜井均　佐々木彰　佐々木欽三　佐藤年　澤田隆治　沢田隆三　【し】重延浩　重村一　静永純一　嶋田親一　清水満　下崎寛　下重暁子　城菊子　白井博【す】菅野高至　杉澤陽太郎　杉田成道　鈴木嘉一　鈴木昭典　鈴木克明　鈴木典之　鈴木道明　須磨章　【せ】せんぼんよしこ　【そ】曽根英二　【た】高島秀之　武本宏一　田澤正稔　田中昭男　田中秋夫　田中直人　田中則広　田原英二　田原茂行　【ち】千葉勉　【つ】辻本昌平　露木茂　鶴橋康夫　【と】土居原作郎　堂本暁子　戸田佳太　外崎宏司　豊田由紀子　豊原隆太郎　【な】中崎清栄　中島僚　中田美知子　永田浩三　長沼士朗　永野敏一　中村敦夫　中村克史　中村季恵　中村耕治　中村敏夫　中村芙美子　中山和記　難波秀哉　【に】新村もとを　西ヶ谷秀夫　西川章　二宮文彦　丹羽美之　【の】信井文夫【は】橋本潔　林健嗣　林裕史　原由美子　原田庸之助　原田令嗣　【ふ】深町幸男　藤井チズ子　藤田晋也　藤久ミネ　【ほ】星田良子　堀川とんこう　【ま】前川英樹　松尾羊一　松平定知　松前洋一　松本明　松本修　松本国昭　黛りんたろう　【み】三上義智　水上毅　水野憲一　三原治　三村景一　三村千鶴　宮川鑛一　三宅恭次　明神正　【む】村上光一　村上雅通　村上佑二　村田亨　【も】諸橋毅一　【や】八木康夫　矢島良彰　薮内広之　山県昭彦　山崎隆保　山崎裕　山路家子　山田尚　山田良明　山根基世　【よ】横山英治　吉澤保　吉永春子　吉村直樹　【わ】渡辺紘史

編集長交代の弁

松尾羊一

ただいま晩酌がてら会報のバックナンバーを開き、往時茫々、来し方、故人を偲んでいて思い出した。発足時の数回分の会報は台本専門の印刷屋に依頼し、内容も人事やお知らせなどが中心でレイアウトも業者まかせの官報まがいのしろもの。「なんだ、こりゃ」とケナしたら「なら、お前さんやってみな」。売り言葉の手前、引くに引けず「やるか」。しかし「この指とまれ」ったって誰もいない。大山勝美さんが「松尾先輩、エジさんを口説いて入会させた」と吉報。早速エジさんこと伊藤雅浩に『調査情報』時代みたいに毎回事務局で酒が飲める」となだめすかし、鈴木典之も引き込んで編集部成立！あれから11年、「会報が楽しみです」という半ばお世辞の声に励まされ齢も80と1．「頭がたかいぞ、これが目に入らぬか」と車中で杖をこれみよがしにかざせば「どうぞ」と気の弱いキャリア嬢が席を譲ってくれます。「日本も捨てたものではない」と勝手に解釈するワル老人ともなれば年貢の納め時か。といってノラ相手に縁側で昼酒というのもいかがか。ま、伊藤新編集長の下、縁側でなく事務局の忍び酒入りの顧問あたりがよろしいようで。ご厄介になります。

編集後記

▼松尾さんには広報委員長交代の弁の原稿をお願いしたのだが、届いたのは編集長交代の弁になってしまった。ま、それはいいのだが、そんな具合で交代を納得させられている。皆さん、ともどもよろしくお願いします▼今号から、菅野高至さんと田中秋夫さんに連載をお願いした。菅野さんには時代劇のことを（次回からもう少し長く）、田中さんにはラジオのことを書いていただく。▼事務局の佐藤真美子さんがおめでたで、間もなく産休に入る。その間、須斎恵美子さんが事務局につとめる。須斎とは珍しい名前だが足利に多い名前だそうだ。TBS制作部デスクとして働いたことがあり、会員に結構知り合いがある。

佐藤真美子さん

須斎恵美子さん

▼事務局の前の麹町中学の新校舎が完成しました。何でも新しいものは気持ちいい。（視郎）